

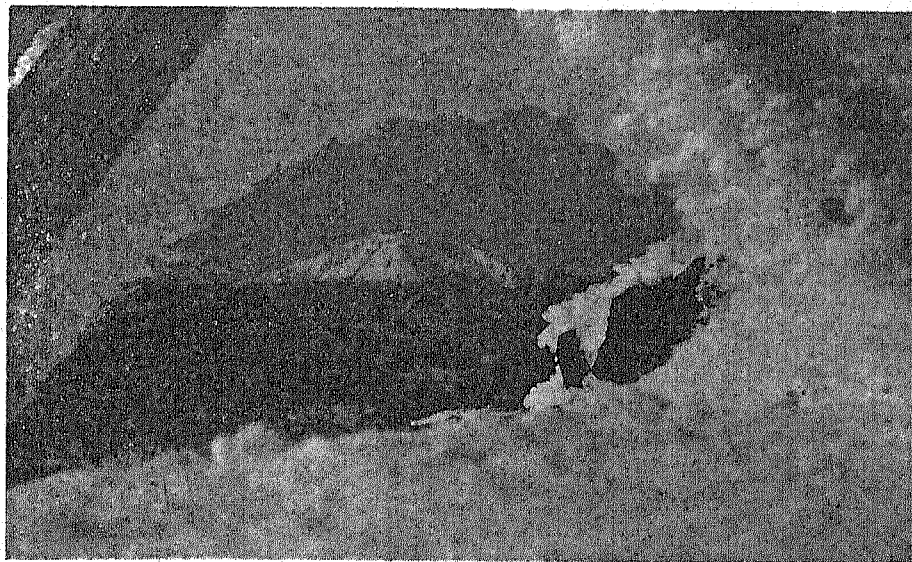
上
野
用
紙

東千曲會報

昭和十七年八月二十五日

第九十號

社団法人千曲會



(影撮氏陽高崎柴) 望を岳御りよ頂山鞍乗

目次

- △鹿麻呂を繞る……………山口定次郎(二)
- △「アラメより分贈せ
△る一新ボリベグチー」大平敏彦(三)
- △「就て」概要
- △農村から……………破 輕(四)
- △隨感の一二……………良 亘(四)
- △迎春花と滿洲……………瀧澤恒雄(五)
- △科擧點描……………(五)
- 飄草から駒(靈の新雄鑑別法)
- スコールとは
- 細菌の力
- 石油の成生説
- △俳句……………祥 雲(五)
- △母校便り……………(五)
- 行元自忍教授陸軍司政官に榮轉
- 防空演習
- 三年生の教練査閲
- 柔道班全國高等工業學校
武道大會に優勝三年連覇成る
- 劍道班全國大學高專劍道大會
に活躍
- 第二期始業式
- 奥正巳教授山形縣養蠶聯誼會に
出張講演をなす
- △地方通信……………(六)
- 千曲會宮城支會總會記……………(七)
- △本會記事……………(七)
- 本會日誌
- 遠藤先生退官記念品受領報告
- 銚後資金應募者
- 會費領收……………(八)
- △敍任辭令……………(八)
- △計報……………(九)
- 弔慰金募集
- 弔慰金報告
- 渡邊君の御戦死を悼む…亘生(九)
- △會員動靜……………(一〇)

筆者は最近中支漢口を中心に蠶繭、支那、滿洲等の苧麻蠶事情の視察調査を終へ過日無事歸任せられた。ここに左の玉稿を得て御紹介する次第である。

苧麻蠶を繞る二三の問題

山口 定次郎

印度の苧麻蠶が臺灣に入り日本の苧麻蠶になつてから僅かに四、五年目、現在では臺灣は勿論之を中心に滿洲、朝鮮、内地等移る所に移入され更に昨今中支方面にも入り込み旺盛に研究されるに至つたが、之は一面に於て苧麻子油と纖維生産が現下の緊急問題となつてゐることを語るものであるまいか。

苧麻蠶業の目的

苧麻蠶が苧麻葉を食べその繭は立派な纖維として用ひられるといふ理由から苧麻子油増産の助長策として取入れられたものであることは或るや申すまでもない言換へれば苧麻作だけでは他作物の粗収入に劣ることをかこつ農民にその葉を利用して養蠶を行はしめ繭の賣上げによる副収入の有利なるに覺めしめ、此の方法で更に苧麻を増殖させたいといふのが本願である。之が即ち第一の目的であるが此の場合動もすると蠶の有利なるに誘惑されて葉の濫採といふ結果を生じやすいが之は正に逆効果であつて、特に此の點に注意せねばならぬ事柄である。第二の目的は凡ゆる纖維類の不足に悩む今日、苧麻蠶繭が種々の點から副蠶絲の利用に最も良く適當したものであらうとの理由から、第一の目的を没却しても繭生産即養

蠶を主として纖維を増産したいといふ所にある。現在纖維の統制と資源獲得に悩む有つ多數の關係會社が早くから此の方面に大なる關心を向けてゐることは或るや明白な事實である。

斯くの如く苧麻蠶業の目的も自ら分化して來たともいへるので、斯業の利不利論もこゝに論議をおかねばならぬ。殊に内地に於ける苧麻蠶業採否に當つては一方に家蠶業が在るのであるから、その目的が苧麻子増産にあるか、或は纖維の増産にあるか又はその中間を探るか等を前提として夫々調査も行はねばならぬ。

例へば第一の目的の爲には如何なる摘葉法によれば苧麻種子の收穫量を減ぜずして繭を多收穫できるかを工夫せねばならぬし、又第二の目的を主とする場合には種子の減收は度外視しても家蠶の桑園に於ける様に、有利な苧麻園の經營を工夫せねばならぬし又代用食が有利であるならば之が研究もせねばならぬ。○○會社に於ける樗(シンジュ)又はニハウルシ)利用の惠利蠶(ヒマサンと同じ)は此の例である。

摘葉と種子との問題

苧麻蠶が苧麻栽培助長策として取上げられる限り、摘葉が種子收量に悪影響をもたらすであらうとの心配は苧麻蠶業の最も大きな悩みである。従來の試験に從へば八月頃七八割摘葉は大なる支障が無いことを示してゐる。勿論採葉方法、時期

量等により結果は違ふものであるが、然し一般農民の實際問題としては苧麻の三割以内を限度とするのが安全の様に考へられる。之れで果して農民が蠶を飼育し收益の大なるを思ひ苧麻栽培が助長されるか否かは疑問であるが、假に養蠶をしないとしても特に種子が多くなるのでないから養蠶は行つた丈け利益だといふ考へを起させねばならぬ。勿論僅かながら勢力を考慮に入れねばならぬ。

越冬性の問題

苧麻蠶は著しい多化性昆虫で休眠時代がなく家蠶の様に卵でも越冬しないし柞の如く適温以下の場合及食物の無い場合は勿論絶滅して終ふものである。従つて大量的に蠶種を繼續し増殖する爲には冬期も苧麻栽培が出来ぬ地方で養蠶をせねばならぬ。現在の所此の條件を備へてゐるのは常夏の國臺灣をおいて他に無一。九州南端も上海も漢口も大體北緯三一度内外で等温線亦同じく冬期は零下の氣温が屢々來るので之より以北の地方では何れも苧麻の冬期栽培は不可能で、従つて自然状態では冬期蠶種の繼續が出来ない。

故に之等の地方で苧麻蠶を飼育するとすればその原種は現在の所飛行機輸送を行ふとしても必ず臺灣に仰がねばならぬでなければ温室利用で苧麻栽培を行ひ又苧麻蠶飼育を行はねばならぬが、此の場合には栽培數と飼育量に制限が加へられ大量飼育が出来ず不自由なのは當然である此の點で臺灣は苧麻蠶の原種製造基地として重要な所である。尤も滿洲苧麻蠶會社では既に鹿兒島縣指宿町に温室利用

で冬期の苧麻栽培を行ひ冬期蠶種の維持を行ふことにしてゐる。之は本邦内地唯一の苧麻蠶原種製造所であらう。尙之等温室栽培や、苧麻蠶の卵或は蛹の越冬法は今度大いに研究されねばならぬ。現在蛹の越冬法は實際問題として可也迄可能ながある様に考へられる。

苧麻蠶の品種問題

苧麻蠶が纖維を生産する昆虫である限り繭層の大なるを希望されるのは當然であり之が良品種ともいへる。然し一面に苧麻栽培の女房役として考へる場合は家蠶に於ける以上に之の強健性が重要な條件になるのであるから品種改良の場合も徒に繭層を多くする反面脆弱性が伴はぬ様にせねばならぬ。苧麻蠶も一般に考へられる程強くないと考へるのが安全であらう。軟化病も不結繭蠶も、微粒子病も出るものと心得ねばならぬ。因に現在の所苧麻蠶の繭層歩合は一〇—一五%位である。

苧麻蠶と樗

苧麻蠶はシンジュサンの亞種で非常に近縁であり酷似してゐるが同一種ではない。苧麻蠶は極端な多化性で休眠時代が無く寒地では越冬出来ず死ぬので日本には從來棲息してゐなかつた。繭は白色のものや灰褐色がある。之に對し樗蠶は柞の如く蛹で越冬し五、六月羽化し八、九月再び羽化する二化性である。樗(シンジュ)或はニハウルシ)を主食とするがナンキンハゼ、クサギ、ニガキ、キハダ其他を食べ雑食性である。繭は灰褐色である。尙ヒマサンは印度ではエリスアンともいふ。絹はエリ絹として知られてゐた。

母校纖維化學科大平敏彦先生には左記首題の論文を豫て東京帝國大學に御提出中の處農學部教授會を通過し七月十四日付を以て同大學より目出度く農學博士の學位を授與せられた。紙上を以て御慶祝申上げ、益々先生の御發展を祈念する次第である。こゝに該論文の概要の御執筆を特に乞ふて、左に御紹介の榮を得た次第である。

「アラメより分離せる

一新ポリペプチドに就て」概要

大 平 敏 彦

表題の論文「アラメより分離せる一新ポリペプチドに就て」は著者が東京帝國大學教授藪田博士指導の下に研究したものであり、此の度副論文「葛葉のケンペロール配糖體に就て」及び「萩葉中エリオデイウチオールが存在に就て」と共に學位請求の主論文として東大に提出したものである。主論文の大部分は東大農學部に於て研究したのであるが未完成の儘本校に勤務することとなつた爲本校纖維化學教室に於て引き続き研究に従事した。本文中ホフマン分解及びそれに關係する合成がそれである。従つて本論文の完成には井上校長殿古谷科長殿始め諸先生方の御厚意を辱けなくしてゐる。概要記事に當り諸先生に對し、謹んで謝意を表す。

アラメは本邦海岸の岩礁上に廣く繁茂する褐藻である。著者は本海藻を水又は酒精にて浸出し、其水溶性物質に就て調査中水溶液濃縮物に常に蛋白質反應なるビウレット反應あるを認め、此れが追求分離を企てた處、全反應顯著なる結晶を分離する事が出來た。此の結晶は一種のポリペプチドである事が解つたが、未

だ文献に表れてゐない物質であつた爲、アラメの學名に基いてアイゼニンと命名し、化學的組成及化學相構造の研究を進める事となつた。尙ほ本研究に當つてはアイゼニンが試料乾燥又は貯藏中酵素作用に依り二次的に生成した物ではないかと云ふ疑念もあるもので新鮮物を直ちにメタノールに浸漬しこれを以て實驗し又静岡縣、神奈川縣、千葉縣等産地を異にした試料に就ても實驗したが何れの場合もアイゼニンの分離が可能である事が認められた。

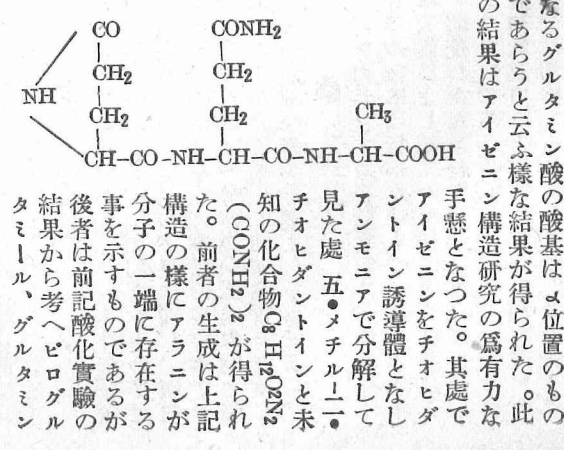


授教平大の室究研

然しこれ等は何れも舍利別狀或は樹脂狀にして結晶とはならなかつた爲物質に關する明快な説明は行はれなかつた。然し此れに依つて海藻類に褐藻類中にはペプチドを含有するものある事が肯定し得られる。

アイゼニンの分離法として著者の取つた方法は先づアラメを酒精にて熱浸し、これより、マンニツト、單仁性物質其の他の不純物を除いた後アイゼニンを醋酸水銀にて沈澱せしめ、此の沈澱からアイゼニンを得た。アイゼニンは稀酒精から再結する時は美しき絹糸光澤のある毛狀の長針狀結晶で純品の收量は約一%に達し、ハース氏等の何れの場合より多量であつた。尙始めの浸出と沈澱操作を充分に行へば收量を増し得る傾向を認めた。

分子式は $C_8H_{10}O_6$ であり、精査の結果グルタミン酸二分子アラニン一分子及アンモニア一分子からなる示性式 $C_8H_{14}(CO_2NH_2)(COOH)$ に相當する物質である事が明となつた。之れを稀バリタを用ひて加水分解すると示性式 $C_8H_{14}(CO_2NH_2)(COOH)_2$ なる化合物に變るが、之れを亞硝酸にて酸化し、更に加水分解し、或は過酸化水素を以て酸化して其の生成物の檢案に依りアイゼニン分子中で前記三つのアミノ酸がアミド結合に



成すべき琥珀酸及アラニンの他 $C_8H_{10}O_6$ なる未知物質が得られたに過ぎな

つた。然し此の未知物質は濃バクタにて加水分解する事により幸にも目的とするジアミノ酪酸の生成を見る事が出来た。本品は合成して比較確證するを得た。前記中間物質に就ては理論的考察と實驗の結果により、ヘキサハイドロピリミジン、二・オン、六・カルボン酸なる新化合物である事が知られた。

以上の實驗結果によつてアイゼニンは別記の構造に該當する化合物即ちイ・ピログルタミール(十)・グルタミール(十)・アラニンなる一新ポリペプチドに他ならぬ物質である事を證明する事が出来た。

論文の概要は以上で終るがポリペプチドは元來蛋白質の部分的加水分解或はアミノ酸からの合成によつて得られる物質であり、フィッシュヤール以來多數のものが造られてゐるが、海藻以外の生物體から分離確證されたものとしては重要生理機能をもつて知られるグルタチオンのみに止まる。然るに海藻中に此の種化合物の存在するものあるは興味深き事である。アイゼニンの生理化學的意義は元より全く不明であるが其の構成因子としてグルタミン酸を多量に持つてゐる事から食品化學的に考いてアラメも調理の工夫によつては更に美味なる含沃度食品たらしめ得るものではないかと思はれる。附記して此の稿を終る。

大平敏彦教授の略歴

大平教授の本籍地は静岡縣富士宮市大宮一八九番地にして、氏は静岡中學校より第二高等學校理科甲類を経て大正十二年四月東京帝國大學農學部農藝化學科に入学、大正十五年同校同科卒業後大學院に學び東京帝國大學助手を歴任し昭和十五年三月上田蠶絲專門學校教授に任ぜられた新進氣鋭の學者である。



農村から

破 輕

隨 筆

私は農業倉庫の一事務員として食糧の増産確保に餘生を捧げて居る者である。この頃の千曲時報隨筆欄を讀んで、この時にも都人士は随分餘裕裕々たるものだなあと感嘆せざるを得なかつた。十二月八日後の今日でもそんな自由主義者がこの日本に居るのかと思ふと呆れる外はない。

農村の生活には日曜日が無い。遠い昔から月火水木金金である。この一億總進軍の折柄遊びに時を費やす人間は一人もないのである。自分の耕やす田畑にも國策が加へられる、何が儲かるから何をすると云ふことは出来ないのである。

その汗によつて穫たる俵物を悉く供出を命ぜられ、而かもその代價を全部貯金に振向けられるのである。牛も豚も、鶏も卵も自由には賣れない。暗で捌けば數倍に賣れるものを何にも御國の爲だと觀念して安い公定價格で集荷人に渡す。

これが都人士の血となり、肉となることを思ふと都人士たるものゴルフ遊びどころではあるまい。頭を練るには讀書もよい、圍碁もある。體を練るには剣道もある。散歩も亦捨

道もあろう、相撲もある、散歩も亦捨

て難い。何を苦しんで稀少な資材や擴大な閑地を要するゴルフを勤める必要があるのか昔からの情勢でやつてる連中は無理に止めるにも當るまいが宣傳だけは止めて貰いたい。これを吾が邦六千萬農村人の聲である叫びなのだ。(筆者は絲五回卒)

隨感の一(二二)

良 亘

繭短纖維

絹絲の用途開拓の重大使命のもとに生れ出た繭短纖維は時代の寵兒として各地各所に於て研究せられ、各種各様の方法で競ひ製造せられ居る事は誠に喜びに耐へない事である。この創造時代に於て東に開蘭式、西に練蘭式と分類せられ更に細別する時は、多種多様に各工場特有のものとなるのであるが、要諦は編物に織物に最も適當の製品を製造する事にあるが、近視眼的に肉限にて只々分離状態の良き事、ネップの少なき事のみ主眼を置くの弊なきやと思ふのである。その爲めに不良藥品の使用となり一時は油脂分の作用にて分離状態にあるも時間の経過と共に變色し油脂分の悪作用の爲め傷むものあり、水洗乾燥の不十分より全樣變色油焼けの怖れあるものあるは誠に遺憾の事である。

繭短纖維の製造に對しよく使用者の意見を徴してこの新しき纖維の成長を祈る次第である。

玉 絲

玉絲とは何ぞやに對する解答は大へんに難解となつて來た様である。一體同功繭を以て練絲せるものが單繭を以て練絲するの業態となり、玉絲と本絲との區分は次第に困難となりつゝあるの現状である。

本絲は本絲としての途あり玉絲は玉絲としての途ありだ。何ぞ鳥が鶴の眞似するの愚やある。

黃 絲

織物製造上生絲の配給切符が交付せられ、原絲の配給數量の制限は、織物仕上數量の限定となり、従つて生絲は織物に仕上げて練減の少きものゝ要求せらるゝ事となり、従つて價格でも特別安きならばいざ知らず黃絲は大分嫌はれて來た様子である。

一時輸出花やかなりし頃にも前途不安を唱へられしが需給の關係は左迄悲感せずには經過し得しも今や其の危目前にせまるの形相を呈するに至つたのである。

太絲か細絲か

生絲の生産割當が決定した昨今製絲家の本年度の練絲計畫は如何？業手の不足と石炭其他の必需品の不足に對し、原料繭の配給の多き事生産割當の多き事より何れの途を選ばや勢ひの向ふ處太物主義にならんか品質果して如何品質を考慮しつゝの能率主義こそ望まじき事である。

桑

天を相手とする養蠶業たるが故に仲々計算の様には行かないものである。本年は天候はよし總ての條件に恵まれ桑はよく繁茂したため終に殘桑を大分残してしまつたのである。而して殘桑の處分は早掃初秋蠶用にと殘された分もあるが、大部分は切捨てられてしまつたのである。

誠に新しい事である。種々桑の利用方法は唱へられてゐるが今少し簡単に實用化の道なきものかとおしくもあり悲しくもある。

(筆者は紡二回卒)

迎春花と満洲

學生絲三 瀧澤 恒雄

「ホー、これが迎春花と言ふ花なんだね」と最近渡満した妹から来た手紙の中に挿入してあつた一輪の押花を一種の好奇心をもつて眺めた。一見してこゝろで俗に言ふ「チヨク」によく似ているがもとより押花だし、色合も實際のものとなつてしまつてゐるかも知れぬし、又香もなかつたが、六個の花弁をもつた紫色の倒卵形の花で、黄色の蕊に、莖から花の裏面にかけて銀白色の綿状の毛が密生して流石に彼の地で珍重されるだけあつて、どことなく温雅な大陸的な風趣を味はせる花であつた。「迎春花が咲いたなら」で聞き覚えて居る花でもあつたし、この花に纏る多くの物語この咲くのを待つ其の心情を想ふとき、また別な何とも言へぬ氣持を抱かせられた。極寒零下四十度の彼の地で氷雪が消えて春の響音が聞かれると共に眞先に咲くのがこれたといふ。思ふに去年も今年も到る處に美しく咲いて、北邊鎮護の大任を負ふ皇軍將兵皆様を慰めて呉れたことであらう。迎春花から満洲なる皇軍將兵及大陸の野に日夜奮闘されている開拓の戦士を思ふ。眼切つて北邊の守りに任せられ、大東亞戦争完遂に身を賭して御努力されている此の地の皆様も既に迎春花の時を過ぎて一足飛びに夏となつて、炎々百度を過ぎる大陸の酷暑と戦はれてゐることであらう。私達は其の御奮闘に無限の感謝を捧げ、御健康を祈つて已まない次第である。



科學點描 (4)

瓢箪から駒 (蠶の新雌雄鑑別法)

千曲時報第百二十五號で表題の様な、原田先生の御高説を拜讀した事があつた。あれ程理論的ではないが、こゝで蠶に現れた科學の夢の實現を紹介する。

蠶にX線の刺戟を與へて變りしものを造るといふ洵に變てこゝな研究から素晴らしい胸が飛び出した。本年度蠶絲學賞受賞の榮を得られた、田島氏のW轉座によるセーアル斑紋の雌雄鑑別がそれである。

X線の刺戟によつて染色體の切斷が起り、それが他の染色體に附着する事は既に多數の生物で實驗、研究がされてゐる。このチヨン切れた染色體片が、①性を決定する染色體のWに②優性の表型因子を持つて③密着して而も④健康な子孫を生じたといふ四つの偶然が結合した蠶が出来た譯である。

この偶然が集つたら後は簡單である。蠶では、Zの染色體を持つものは含であり、♀はZWである。そのWがWのコアをつけて子孫に傳はるならば、このコアの性質が未來永劫早と離れる事がない。このコアが幸にセーアル斑紋の性質を現はした。だからセーアル斑紋蠶とれば全部早のみであつて雌雄鑑別はたゞどこに可能である。

將來「家蠶の雌雄はその幼虫の斑紋が明らかに相異するものなり」といふ迷論が出るかも知れない。(日本蠶絲學雜誌十三卷より) (蠶二〇回卒 市川信一氏寄)

スコールとは

熱帯地方に起るスコールとは一口に云へば突風を伴つた一時的嵐であつて不意に去来す

るものである。もつと具體的に云へば急に強風が起り数十分續き比較的急に通り過ぎる。そして屢々起り方向を變へる性質があり、長い孤状の低い黒雲を伴ひ雨を降らし急に温度が降り風の息が著しい。元來此の孤状の黒雲の事をスコール(Squall)と呼んだのである。邦語に譯して俄雨とか早手とか云へば何うも熱帯地方をピント感じないやうである。だから熱帯驟雨とも云へば熱帯のスコールの適譯ともならう。

(科學知識から)

細菌の力

細菌といへば結核菌やチアス菌のやうな病原菌を思ひますが、これらのものは細菌中の一部の菌に過ぎない。私達の日常生活に密接な關係があつて飲食料、製薬、燃料、其他各種の工業に各々のもつてゐる特性を思ふ存分に發揮して重要な役割を果してゐる細菌が非常に多い。特に我々の關係する方面では、菌絲の長い黴を利用して織維を探らうとする研究があり、又織維の腐化精練に細菌を用ひやうとする企てが織維工業方面にも起つてきたことである。この研究はアルカリによる來の化學的精練法が藥品不足の爲に意の如く行はれぬ今日興味あることとこれが完成の域に達すれば不足勝ちなアルカリの世話にならずとも立派な織維が得られることになる。更に染色に用ひる糊剤にも細菌の強力なる濃粉液力を利用した製品が現はれてきた。神秘的な細菌の世界を研究し、その性質を明かにして利用の途を考へれば必ず面白い仕事が見つかるだらう。(工研から)

石油の成生説

植物説、腐泥説、動物説があるが、現今では最後の動物説が最も有力とされてゐる。即ちそれは、大昔棲んでゐた魚類や微生物の死骸が分解し、脂肪の中に含まれてゐる脂肪酸が水に溶けない性質なので、一定の場所に集つて石油になつたといふ説である。(雜誌キングダより)

俳句

祥雲

線陰の巡回文庫人まばら
固き糊さばきて浴衣着たりけり
手にあまる西瓜に吾子の機嫌よく
山の温泉に電車は着けり暁時雨
炎天に火屑こぼしてバス手入れ
(作者は絲二四回卒 山崎修也氏)

母校便り

行元自忍教授

陸軍司政官に榮轉

行元教授は臺北帝國大學生徒主事補歴任後昭和十二年九月上田蠶絲專門學校生徒主事兼教授に任せられしより五ヶ年間に、母校生徒の訓育に盡瘁せられたる處此度陸軍司政官として南方某要職に就かれ、大東亞共榮圈確立のため活躍されることになつた。母校在職中の先生の勞を謝すると共に尙一層の御健康と御奮闘をお祈り致す次第である

防空演習

長野縣下の防空演習に呼應して七月二十八日、上田警察署長始め多數の署員、警防團指導の下に、燒夷彈の消火、處理法、救護法等色々細密なるお話を聞き、二キロ及び五キロ燒夷彈の實演の後、養蠶部物置に燒夷彈落下、製絲部に延焼の想定の下に演習を行ひ後講評があつた。

三年生の教練査閲

七月十四日暑熱の下、倉石少將を迎へ三年生の教練査閲が行はれた。銃劍術、各個教練等は校庭で、職團教練は飛行場で行つたが、聖職下、學生の緊張振りを遺憾なく發揮し良好な成績を終了した。

にも不拘倉澤理事の御出席を得たことは有難い極めてあつた。

本會記事

七月十二日 製絲科出身者へ會費納入告知書發送す

贈呈資金受領報告(八月五日在)

事後資金應募者

- 金壹圓也 市村志眞 衛
右合計金壹圓也
累計金七百貳拾九圓也

會費領收

(八月五日在)

Table with 3 columns: Donor Name, Amount, and Address. Includes names like 昭和田 逸郎, 栗原 章, etc.

製蠶

Table with 4 columns: Title (e.g., 蠶種製造), Author, Amount, and Address.

製絲

Table with 4 columns: Title (e.g., 製絲原料便覽), Author, Amount, and Address.

- | | | | |
|------------|-----------|----------------------|------------|
| 竹内 好武(蠶三) | 山内 一次(蠶三) | 中島 德健(絲元) | 三尾三右衛門(絲元) |
| 小木曾真佐雄(蠶四) | 山内 俊夫(蠶四) | 大山 鎮洪(絲元) | 狩野 宏平(絲元) |
| 阿形 一三(蠶三) | 瀧澤 七朗(蠶五) | 税田 廣喜(絲元) | 小林 剛(絲元) |
| 中西 全(蠶三) | 矢野 進(蠶五) | 竹内 五郎(絲元) | 山口 亮祐(絲元) |
| 有間 正久(蠶元) | 瀧澤 昌一(蠶元) | 若林 中孝(絲元) | 飯島 貞雄(紡一) |
| 萩原 和夫(蠶元) | 箱山 住夫(蠶元) | 山岸 清保(紡一) | 服部 虎雄(紡一) |
| 山田東洋男(蠶元) | 竹下 清(蠶元) | 香山 清和(紡三) | 本田 圭吉(紡六) |
| 阿武 忠雄(蠶元) | 池田 逸郎(蠶元) | 藤井富美男(紡八) | 齋藤猪之助(紡三) |
| 清水 彰(蠶元) | 鈴木 行(蠶元) | 佐久間幸一(紡一) | 坂藤猪之助(紡三) |
| 松尾 卓見(蠶元) | 井上 一郎(絲五) | 岩瀬 正典(紡六) | 土屋 勉(紡五) |
| 陶山 專三(絲六) | 手塚 雄一(絲六) | 柳澤 柳二(紡七) | 岡田 幸一(紡三) |
| 西 孝(絲八) | 南澤 清(絲九) | 藤井 聰夫(紡七) | |
| 蒲生 勇一(絲三) | 牧野 春雄(絲三) | 昭和十六年度會費金四圓也 | |
| 青木 友彌(絲二) | 緒方 良純(絲三) | 瀧井 壽夫(蠶二) | 細川 照(蠶八) |
| 白井 要範(絲三) | 福島銅治郎(絲三) | 池田正五郎(蠶二) | 谷川 梅造(蠶三) |
| 小島 求(絲三) | 後末 武猪(絲三) | 中澤 二郎(蠶二) | 濱村 一彦(蠶元) |
| 瀨本 啓一(絲四) | 内藤 次郎(絲四) | 枇杷木 瀧雄(蠶九) | 西澤 政人(蠶三) |
| 野尻 白二(絲四) | 山口 兼雄(絲五) | 桂 元三(蠶五) | 阿武 忠雄(蠶元) |
| 野澤 富雄(絲五) | 角替 起夫(絲五) | 加子 三郎(蠶七) | 石塚浪之助(絲七) |
| 三谷 俊郎(絲六) | 永井 益巳(絲六) | 父母 仙藏(絲四) | 山田 奔一(絲三) |
| 和野 益巳(絲六) | 藤野明之助(絲六) | 木藤富士雄(絲三) | 本田 懋(絲三) |
| 藤野 誠一(絲七) | 荒本 康男(絲七) | 佐藤 孟(絲五) | 三宅農富榮(絲三) |
| 湯淺 文雄(絲七) | 柳澤 榮一(絲七) | 藤森 美明(絲五) | 岡田 幸一(紡三) |
| 田口喜一郎(絲八) | 井上 正夫(絲八) | 阿部 豊(絲六) | |
| 東家 明秀(絲九) | 秋山武一郎(絲九) | 昭和十八年度會費金四圓也 | |
| 本多 懋(絲九) | 中島 熊保(絲九) | 終身會費納入者 | |
| 林 清市(絲九) | 山崎 菅録(絲九) | 小松 茂久(蠶九) | 町田 壽男(蠶九) |
| 志賀 豊(絲三) | 荻原 行夫(絲三) | 井上兵一郎(蠶三) | 本山 正美(絲九) |
| 竹内 正司(絲三) | 白井 美明(絲三) | 手塚 政吾(絲三) | 林 秀門(絲九) |
| 松村 惠一(絲三) | 藤森 朋美(絲三) | 未納會費納入者 | |
| 山本金之助(絲三) | 水上 精一(絲三) | 金拾六圓也(昭和十、十一、十三、十四年度 | |
| 太田 三郎(絲三) | 一之瀬 茂(絲三) | 分) 藤森 明美(絲三) | |
| 白井 四良(絲三) | 北澤 常雄(絲三) | | |
| 林 正平(絲三) | 高橋 英(絲三) | | |
| 今村 覺治(絲三) | 吉田 爲雄(絲三) | | |
| 桑本 正義(絲三) | 中山 泉(絲三) | | |
| 關 喜四郎(絲三) | 田中 實(絲三) | | |
| 東島藤次郎(絲四) | 土生 靖二(絲四) | | |
| 高橋重一郎(絲五) | 磯部 鐵雄(絲五) | | |
| 原口惣一郎(絲五) | 塚田 和磨(絲五) | | |
| | 中島 藤治(絲五) | | |

叙任辭令

- 現職員之部
上田蠶絲專門學校教授 佐藤 利一
賜三級俸
同
三級俸下賜(以上六月三十日) 原田 親雄
- 上田蠶絲專門學校教授 柳澤 延房
同 大平 敏彦
陸高高等官五等(以上七月一日) 行元 自忍
上田蠶絲專門學校生 任陸軍司政官、彼高等官五等(七月二十一日) 幸業生之部
農林技師 田口 敏夫
一級俸下賜 同 原田 兵衛
二級俸下賜 同 沖 濤治
生絲検査所技師 三級俸下賜(以上六月三十日) 本谷 良雄
公立實業學校教諭 高等官五等特選(七月一日) 從六位 田口富五郎
從六位 日比野一夫
彼正六位(以上四月十五日) 同 石濱 正巳
公立實業學校教諭 六級俸下賜(六月二十二日) 坂田 榮雄
地方農林技師 五級俸下賜、願ニ依リ本職ヲ免ス(七月四日) 三橋 宜夫
公立實業學校教諭 滿洲國へ出張ヲ命ス(七月三日) 野尻 白二
永井 俊郎
彼從七位(以上四月十五日) 尾藤 省三
蠶絲試驗場技師 陸高高等官六等(七月六日) 新庄哲二郎
地方農林技師 七級俸下賜(六月十七日) 前澤 康雄
公立實業學校教諭 滿洲國へ出張ヲ命ス(七月十六日) 桑田 庄七
地方農林技師 九級俸下賜 依田寛之助
九級俸下賜 地方商工技師 中尾小太郎
山形縣立庄内農學校 教諭陸軍少尉八位 公立實業學校教諭兼倉庫主任、高等官七等特選 庄内農學校教諭兼倉庫主任補(七月二十七日)

本校辭令

- 正六位 岡村 源一
同 岸 勝彌
從六位 金崎 眞英
同 田浦 繁
福富 繁
彼正六位(以上五月十五日) 小平 光雄
地方農林技師 八級俸下賜 猪瀬 親二
公立實業學校教諭 七級俸當分千六百十圓下賜(以上六月三十日) 從七位 山崎 壽
彼正七位(五月十五日) 從七位 長瀬 深見
地方農林技師 七級俸下賜(六月三十日)
- 兼講師ヲ囑託ス(七月十六日) 丹下 史郎
講師ヲ囑託ス(七月二十二日) 高岡 米治
願ニ依リ副手ヲ免ス(七月二十七日) 宇田 哲郎
臨時副手ヲ命シ養蠶科勤務ヲ命ス(七月三十一日) 副手 清水 彰
願ニ依リ副手ヲ免ス(八月十七日)

御挨拶

謹啓 時下向暑之初益々御清穆之段奉大賀
候者小生福井縣在職中は公私共格別なる御
高庇を辱ふし御芳情洵に難有感銘罷在候處
今般日本蠶絲統制株式會社に入社仕り福井
出張所並福井生絲事務所勤務致す事に相
成候條今後共一層の御指導御鞭撻を賜度奉
懇願候
先是不敢御禮勞々御挨拶申述度如斯御座
候
昭和十七年七月
事務所 福井市佐佳枝中町
自宅 福井市日之出中町一四
坂田 榮 雄

計報

弔慰金募集

飯田省三氏(納十八) 故古郡友次氏(蠶廿七) 故渡邊善次氏(蠶廿三) 以上三氏に對し弔意金を募集致します。故飯田氏は八月末日、故古郡氏は九月末日、故渡邊氏は十月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひます。三氏に對し各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。 昭和十七年八月 千曲會

弔慰金報告

(八月五日) (現在)

- 故正木章三氏弔慰金 金五圓也 竹内萬二郎
右合計金五圓也
累計金參拾七圓也
故宮田皓氏弔慰金 金貳圓也 目崎 武美
右合計金五圓也
累計金五圓也
故迫繁氏弔慰金 金貳圓也 目崎 三郎
右合計金貳圓也
累計金貳拾圓也
故井上泉氏弔慰金 金參圓也 相澤 仲司
右合計金參圓也
累計金貳拾九圓也
故古東幹太氏弔慰金 金貳圓也 濱井 壽夫
金壹圓也 栗原 章夫
右合計金貳拾八圓也
累計金貳拾八圓也
故藤井爲五郎氏弔慰金 金五圓也 宮澤 茂雄
佐藤 一郎

渡邊君の御戦死を悼む

H S 生

渡邊君戦死の計報に接したのは、七月十八日の夕刻であつた。大陸より流れ来て来たばかりの小生には特に現地の様子が眼前に浮び、只々呆然自失無言の中、緊々とこみ上げて来る悲憤と無念無情の涙で胸一杯となり、どうしても抑へ切れなかつた。嗚呼、君は血潮で大陸の土を眞紅に染め、君らしく散華したのである。皇國のため軍人として一旦戰場に赴いた以上は一死以て奉公の忠誠を盡すは素より男子の本願ではあるが、一面華々しく凱旋して墟邊に功名を語りたいのは人情の常であり、吾等も蔭ながらそれを希ひ居つたの君の肉體は永遠に此の世を去り興亞の礎石として、その遺勳永劫に輝き、永久に護國の鬼と化したのである。

- 金參圓也 岡 豊次郎
金貳圓也 町田 史郎
右合計金四拾八圓也
累計金四拾八圓也
故土屋久雄氏弔慰金 金貳圓也 目崎 三郎
金壹圓也 山田 次男
箱山 佳夫 目崎 茂原
右合計金拾貳圓也 諸岡 市郎
累計金拾七圓也
故飯田省三氏弔慰金 金貳圓也 目崎 武美
右合計金六圓也

間として囑目されたのに支那事變中〇〇の命下り、入隊後は甲種幹部候補生に合格、見習士官として北支に赴任、渡支後間もなく少尉に任官、第一線部隊の小隊長として人間味ある指揮をとり、部下より慈父の如く敬慕され名小隊長振りを發揮された。以上のように短き人生であつたけれども君の在りし日の偉を偲び君に依つて遺された數々の事を追憶すれば限無し。七月二十一日蒲生、倉澤兩恩師と共に御悔の御冥福を祈上。願くは靖國の御社深く鎮まり永遠に神國を加護して下さい。 昨日、君の御尊父様より御戦死の詳報を拜受致し、眞に日本男子とし立派な御戦死に對し、只々感謝感激の涙落つるのみである。 (筆者は蠶二三回卒)



故渡邊善次氏

天山兩實に天候としては悪い日でありました。普通の日ならば日の暮れが九時半でありました。當日は俄かの天候急變の爲一寸目もあられん程度でした。善次君等十名は我が家近所の喜びの下に行軍中だつたと思ひます。後三軒が我が家でありました。此の邊は地形は悪く所々土の山があります。丁度出發せられてから十五分位後前進方向より百名位の敵から一齊射撃を受けました。一つ所に集め次の如く處置されました。一、敵は待ち伏せしあるから突撃を以て突き破る。二、三名は後方警戒機關銃は現在の位置に於て射撃、他は善次君とともに突撃。三、以上の如く區處せられた先づ前進方向正面の敵に突撃せられました。あたるを幸ひ切る突く全員一團となり相當敵に損害を與へました。我が果敢なる突撃に依り敵は稍後退致しました。

(前略) 善次君は昨年十二月國軍の幹部として我が隊に編入され警備隊長或は討伐隊長として日夜繁劇なる警備に努力せられ餘暇には部下兵の教育指導に國軍幹部としての職責を遺憾なく活躍せられた。年記念日の前後北支の鎮護の神として神去りしたる事誠に痛恨此の上もなき次第であります。小生の片腕として實によくやつと戴きました。實に最後は國軍將校として花々しきものであり我が隊全員の追憶の的であります。七月六日善次君には部下十名と共に自分の警備隊より小生の處へ連絡に來られ晝食をとらへていらつと雑談をなした午後三時頃小生は一部の兵を引卒討伐參加の爲某方面行向ひ出發致しました。此の時は善次君には表門に立たれ小生を送られた事が今も目前にちらつきます。善次君は十八時(午後六時)出發歸途に着かれた二時三十分(八時半)頃出發せられた。當日は北支特有の黃塵萬丈の日でありました。事

せられ善次君の當番外兵一名を左右に分け急を傳へる爲に出されました。然し敵は日本軍小と悟りしか善次君等をだん／＼と包圍し手榴彈を投げ射撃をなした。接近して参ります。此の時善次君の胸や如何ばかりと思ひます。部下を持つもののみ知る事です。受傷の身を屈せず第二回突撃を執行せられ獅子奮迅死力を盡されました。日本軍人の腕を見よとばかり格闘されました。然し此の時不幸、にき敵の側方よりの輕機關銃の射撃に依り胸部及左大腿部貫通の致命傷を受けられ次に壯烈なる戦死を遂げられ御奮闘せられ最後迄必殺の精神に燃えられ御奮闘せられ

敵に大なる損害を興へました。直ちに各急
援隊とも駆けつけ戦場掃蕩を致しました。今
は亡き善次君始め四柱の亡き木を收容警備隊
に着いたのが二十時でありました。僅か戦隊
は二十分間戦ひ終了後の部下の淋しき此れ戦
場の習ひとは云ひますが、餘りあつたなきに
驚く次第です。小生も討伐中に之の状況を聞
き無念やる方なく一夜涙に哭れました。きつ

會 員 動 靜

(八月八日現在)

- 丹下 史郎 (現職) 本校講師ヲ嘱託ス(上田蠶絲專門學校)(七月二二日)
- 行元 自忍 (現職) 任陸軍司政官(陸軍省)(七月二二日)
- 絹村 貢 (蠶一) 日本蠶絲統制、愛知出張所長、技師(名古屋市中區榮町一ノ一〇第百ビル内)
- 坂田 榮雄 (蠶二) 日本蠶絲統制、福井出張所兼福井生絲事務所(福井市佐佳枝中町)
- 濱井 壽夫 (蠶二) 日本蠶絲統制、群馬出張所(前橋市紅雲町)
- 永田 平 (蠶八) 長野縣經濟部蠶絲課、技師(長野市)
- 岩瀬 義夫 (蠶八) 長野縣立東筑摩農學校長(東筑摩郡塩尻町)(住)塩尻町大字大門三三
- 中山 吉二 (蠶三) 滿洲蠶絲株式會社指原種蠶製造所(鹿兒島縣掛箱郡指箱町添)
- 吉田 隆雄 (蠶三) (住)鹿兒島市藥師町三三(七月二二日)
- 佐村 和夫 (蠶四) 長野縣立大町高等女學校(北安曇郡大町)(八月五日)
- 宮崎 秋雄 (蠶五) 防府市立防府青年學校(山口縣防府市)(住)防府市大字仁井令(七月二二日)
- 早乙女 德藏 (蠶七) 日本蠶絲統制、山形生絲事務所(山形市香澄町庚申堂)(住)通信先)
- 小林 辰夫 (蠶七) 山形縣東置賜郡屋代村(七月二六日)
- 中澤利三郎 (蠶七) 西多摩地方事務所經濟課(東京府西多摩郡青梅町)(住)東京府立川市柴崎町三ノ二(七月二二日)
- 市村志真衛 (蠶六) 群馬縣蠶業取締所前橋支所(前橋市)(七月一〇日)
- 渡邊 嘉博 (蠶三) 新潟縣蠶業試驗場小出支場(北魚沼郡小出町)(住)小出町(七月三日)
- 渡邊 善次 (蠶三) 新潟縣蠶業取締所十日町支所(十日町西浦町東區)(七月一四日)
- 星野 武美 (蠶三) (改姓)松下(渡邊)改ム(勤)靜岡縣蠶業取締所靜岡支所(靜岡市田町一丁目)(七月二二日)
- 目崎 三夫 (蠶三) 北支ニ於テ戰死
- 佐藤 三夫 (蠶三) 北支ニ於テ戰死
- 加子 三郎 (蠶二) 公用(留守宅)沼津市住吉町三四七ノ二 父目崎三郎
- 甲斐 肇 (蠶二) 北支甲一八八〇部隊(七月三日)
- 榊原 春彦 (絲八) 滿洲國安東省公署實業廳殖産課(七月一八日)
- 本山 正美 (絲九) 日本蠶絲統制、大分生絲事務所(大分市春日浦)(住)大分市上野町四三三ノ一
- 石濱 正己 (絲〇) 鐘紡鐵原工場(朝鮮江原道鐵原邑四要里)(六月三〇日)
- 片倉奈良工場(奈良縣吉野市下市町)(七月二三日)
- 中島飛行機太田製作所、中島航空技術學校(群馬縣太田町)(住)前橋市岩神町二二六(七月二二日)

と仇は取ります。全員仇打ちの爲心魂をくだ
いて居ります。七日亡き柄を小生の所に運搬
し火葬に致し遺骨は現在安置してあります。
(後略)
七月十日
中隊長 山本 長
渡邊榮八殿

- 新庄哲二郎 (絲二) 日本蠶絲統制、金澤生絲検査所(金澤市彦三大通)(七月三日)
- 越 英鶴 (絲〇) 川西航空機株式會社風洞係(兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字大東一)
- 宮原 秀人 (絲九) (住)鳴尾村芝崎一六(七月二日)
- 宮野 文雄 (絲九) 片倉熊本製絲所(熊本市田崎町三四〇)(八月二日)
- 新野 武雄 (絲三) 全國座生絲共同施設組合(東京市日本橋區江戸橋郡是ビル)(七月三日)
- 吉田 爲雄 (絲三) 日本蠶絲統制、長岡生絲検査所(長岡市)(住)長岡市山田町(七月二〇日)
- 高田 正氣 (絲三) 片倉製絲紡績株式會社(東京市京橋區京橋三ノ二)(八月五日)
- 阿部 豊 (絲六) 錦州紡績株式會社(滿洲國錦州省錦州市錦華區浪速街七番地)(七月二八日)
- 富永 暉 (絲六) 全國製絲業組合聯合會(東京市麹町區有樂町一ノ七)(住)千葉市登戸町五ノ二〇二(七月二九日)
- 菅野 正文 (絲六) 海軍航空本部勤務大阪海軍監督官事務所兼神戸海軍監督官事務所(住)大阪市西淀川區花川南之町一八五海友莊(七月二二日)
- 伊東 正雄 (絲六) 中支榮一六四五部隊甲種幹部候補生ニ採用サレ分遣ヲ命ゼラル(六月二五日)
- 岩佐 隆次 (絲六) 東部七部隊
- 上野 康司 (絲六) 東部三六部隊
- 荒木 紹雄 (絲六) 熊本醫科大學學生(住)熊本市出水町長溝四〇六林田ふや方
- 勝田清三郎 (紡二) 日立製作所龜戸工場(東京市城東區龜戸町八ノ一八〇)(住)東京市江戶川區小岩町四ノ二一五筑波莊
- 岩本 一郎 (紡六) 滿洲蠶絲株式會社出張所(錦州省黑山縣新立屯街廣富區二五)(七月三日)
- 柳澤 柳二 (紡七) (留守宅)兵庫縣明石郡魚住村中尾三六ノ一
- 高岡 成价 (紡九) 大同毛織株式會社龍野工場(兵庫縣揖保郡半田村)
- 瀧澤今朝教 (紡三) (勤)倉敷紡績株式會社(大阪府西區江戸堀北通一ノ三九)(住)奈良縣北葛城郡二上村大字知、電話下田七六
- 中支、第一六四五部隊(七月六日)

編輯後記

戦線向けの本會報が後日返戻されるものが
相當多數に上り切角の誠意も肩かないと思ふ
と残念です。相當期間一定地に滞留されるこ
とが豫め若し御判明の場合には住所を御一報
下さい。缺かさず御届けします。尚これから
戦線に向かわれる方も御承知置き願ひます。
内容が(一)小部分の者のみに限られるやうな
記事は(例)ば同期會の通信など、紙面拂底
の折柄なるべく縮少して載せたいものです
紙面を漸次賑やかにして下さるやうになり
感謝して居ります。愈々有意義な御投稿を御
待ちして居ります。
編輯上諸賢の希望条件や聲なども御聞き
したいものです。殘暑厳し折柄會員の御健

昭和十七年八月二十日印刷 (非賣品)
昭和十七年八月廿五日發行
發行所 上田蠶絲專門學校内
編輯兼 萩原 清 治
印刷人 倉基 中 澤 二郎
印刷所 上田市原町五七九五
印刷所 中澤 印刷所
發行所 上田蠶絲專門學校内
社團 千 曲 會
法人 千 曲 會
電話 上田四〇六番、六六一番
東京四三三番、六二四三番
長野四三三番、六二四三番

昭和十七年八月二十五日印刷
昭和十七年八月二十五日發行
第十九號【非賣品】



發行所

上田蠶絲專門學校

千 曲 會

社團